

イギリス王政復古の諸問題（二）

矢 崎 正 徳

目 次

- 一 序
- 二 その政治史的前提——議會と軍隊——（以上の一部第四八号、以下本号）
- 三 仮議会の総選挙概観
- 四 仮議会の活動
- 五 結語

二 その政治史的前提——議會と軍隊——（承前）

財政問題

復活した議會と国家評議會とは活動を開始したのであるが、処理すべき懸案は、第一に、解決不可能というべき国庫の赤字財政問題、第二に、将校の任免問題、第三に、一般的には、構築さるべき国家体制ないし憲法問題であり、

狹義には相対的に時間を多く割いた免責法の問題であったといえる。この中で最も中心的問題は第二の將校問題であった。それがランプ議會と軍隊との最大の争点になったことから判明する。

さて国家評議會を最初から苦しめた問題の一つは金不足であった。評議會は急場をしのぐために、東インド会社に三万ポンドの借金を申し込んだが、一万五千ポンドしか借りられず、シティに対する一万五千ポンドの借金の申し込みも好意ある返答を得られなかった。評議會が提案した一つは共和国時代に発生し、個人の手中にあると言われた大金を即時に徴収するというものであった。しかし農民あるいは他の個人から実質的な税を徴収しようというか、幻想は、新税か国家破産かという最悪の日の到来を単に延期することをランパー達に抱かせたに過ぎなかった。というのは一六四三年から開始された食糧、飲物、その他日用品に課せられる消費税は（消費税という課税形態そのものは、財政史からみれば、その後の国家財政の歳入方法の基本の一つになる創造的なものであったといえる。）^①當時にあっては、その消費税徴収官に対する憎悪にみられるように、嫌悪されており、暴動の原因になる傾向があった。従って、新課税は不可能なことであった。唯可能なことといえば、旧率での直接かつ迅速な納入によって、租税納入遅延の防止に注力することだけであった。^②このようにランプ議會の財政政策には何らのガイドがなく、旧来の重い月々の賦課額に戻ただけであった。また次のような巨額な負債にある軍事費にあっては三王国への付加課税は不可能であったといえる。

デイベイスによれば、夫々異なる時期に議會に提出された軍隊負債の三つの評価表がある。それを例示しよう。
一、五月二〇日の評価。^③

四月二九日までの陸軍の負債

八〇万ポンド	イギリス	二二四、〇〇〇ポンド
	スコットランド	九五、〇〇〇ポンド
	アイルランド	三七一、〇〇〇ポンド

この総額は一年の給与費の弱に、あるいは歳入の半に相当するとされる。また全体の陸軍費は徴収費を除外した全歳入より約一〇万ポンド多いと推定される。

二、六月八日の評価。

五月二十八日までの海軍負債 六九三、〇〇〇ポンド^⑤

六月二〇日頃には陸軍負債 六〇一、〇〇〇ポンド（推定）

年末に帳簿を締めるために、付加的歳入が必要になるが、その金額は一、〇四二、〇〇〇ポンドになろう。この評価表の中で最も重要なことは「手元に即金が全然ない」という記入である。

三、七月二十八日の評価（ヴェインの提出した報告書である）。

七月一日までの陸軍の負債

イギリス 一八九、〇〇〇ポンド

スコットランド 一六七、〇〇〇ポンド

アイルランド 三三三、〇〇〇ポンド

アイルランドの負債は一三ヶ月の遅配給与費を表わしているとされる。二及び三の評価書みられる陸軍の負債を考慮すれば、八八、〇〇〇ポンド総額が増加していることになる。これは前月の給与が支払われていなかったからであ

る。

議会はこれらの報告書、就中、ヴェインのそれを不満足のものとして、討議のためにそれ以上の報告書の提示を評議会に求めたのであるが、評議会の登録はかかる要求に応じた証拠は何らない。従って、議会及び評議会には統治費用を充足するための財政政策がなく、また新課税あるいは借金によって、十分な金を得ることは不可能であったといえる。

注

- ① Cf. Howard Tomlinson "Financial and Administrative Developments in England, 1660~88" in Jones (ed.), *The Restored Monarchy 1660~1688*, 1979, chap. 4.
- ② 一六五三年四月二〇日以後の遅延税金を納入せよせる委員をリンプ議会は任命。(Acts and Ordinances II, 1276~77. May 26) Cf. Godfrey Davies, *The Restoration of Charles II 1658~1660*, 1955, p. 105.
- ③ Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 115~6.
- ④ 軍人の給与の一例としてロンドン及びウェストミンスターにおける当番兵士にいくら支払っていたかを例示すると、一日に歩兵一ペニー以上、騎兵三ペニーである。一六五五年給与カットが行われたが、ここでの部隊はカット以前と同額の給与を得ていたとされる。Cf. Davies, *Ibid.*, p. 115.
- ⑤ 海軍事項のマネイジメントのために、議員、大佐、商人からなる一二人の委員が任命された。彼らには、議会の承認をうるために、船舶の修理、装備のための令状の公布、彼らが勧告する給与とともに、海軍大佐や他の士官の名簿の準備、大佐以下の士官の辞職が可能であった。更に彼らは、海軍に属する全船舶の説明を議会に提供し、すべての腐敗や乱用の除去、備品の浪費なくし使い込みの防止をすることになった。(Acts and Ordinances II, 1277~82. May 31) Cf. Davies, *Ibid.*, p. 105.

將校問題

次に將校任免問題であるが、ランプ議會はフリートウッドをイングリランド及びスコットランドの軍隊の總司令官に任命した。しかし彼の權威は議會あるいは國家評議會の命令に服従するよう制約を受けた。また彼には陸軍將校の任命、昇進の權限は与えられなかった。即ち既に指摘したように、ランプ議會は將校指名の七人委員を任命したが、その時將校任命の權限をフリートウッドに与える条項を削除して、全將校の任命が議長によって署名されねばならない条項を挿入した。これは任命に當って議會あるいは評議會に対する服従が軍の上級幹部への服従よりも上位にあることを示した。つまりこの手続は軍隊が議會に服従すべきだという警告を含蓄していたわけである。デイビスによれば、ヴェイン、ラドロウ、サルウィ等のランプ議會内の少数派はかかる条項に反対したとされる。しかしヘジリッジ、アルジャン、シドニ、ネビルが勝利したわけである。もとより軍指導者はこれを嫌惡した。デイスブラウの家での会合で、ランバードはランプ再召集の条件に違反しているとして、將校の在職期間が議會の意向に依存する条項に含意された軍への侮辱を非難したわけである。七人委員〔代表を出していないスコットランドからは七人官(Sépmvirate)と称された〕が殆どの將校を最初精査し、この試験の後、將校は議會によって承認されることになった。ともかくハカーや他の將校は下院に出頭し、各自が議長から將校職を受領した。この事例は一般的な模範になったのである。

さて、最も問題化したのは將校のページとそれの代替であつた。リチャード議會解散から一〇月一三日のランプ議會解散に至る六ヶ月間にどの位の將校が追放されたかについては正確には知られていないが、大佐から軍需品担当將校に至るまで、約一六〇名位の將校が聴問、告発、裁判なくして免職になったとされている。^③これら被追放者の多く

は主として護民官制と密接に同一視されていたクロムウェル主義者の將校であつた。困難な問題はそのページの代替者のそれであつた。

まずオリバーによる被追放者が復職した。例えば、M・アルレドが騎兵連隊の指揮官に、オウバトンが歩兵連隊の指揮官兼ハルの総督に、J・マソンがジャージイの総督に夫々任命されたのがそれである。しかし一般的に言へば、ランバートやフリートウッド他先輩將校は自己の輩下の子分を押し、文官の將校指名委員は、今述べたように、陰謀ないし不満のかどで、オリバーによって免職になった將校、就中、アナバプティストや他の小セクトと連結していた人達を後援したとされる。もとより両グループとも自分達の友人や親戚を昇進させようとした。ともかく將校任命をめぐる議會と軍指導者との間の争いは漸次深っていくのである。但し後述するブースの反乱によって、両集團の対決は一時延期になるが、この時点での軍隊による議會への反撃は、六月六日に、一六六〇年五月七日までに現存議會が解散さるべきことを議會が議決することによって、即ち、議會が自己の権力の永続化の意図を保持しないことを示すことによって、回避されたのである。^⑤

次にイングランドにおけるかかる將校のページや代替及び昇進はスコットランドのモンク將軍麾下の將校に如何なる影響を及したのであるうか。モンクによる議長を通じての議會宛手紙とその返事、更に再度の議會宛手紙を分析したデイビスによれば、^⑥スコットランドに関して七人委員によって推挙された將校リストは單に院において読みあげられただけで、通過せず、モンクの軍隊構成に實質的な影響を与えなかつたとされている。モンクはまず手紙の中で、スコットランド軍隊の將校変更に反対した。就中、自己の二連隊とタルボットの連隊をいじくらないことを要求した。議會からの返事には、將校が共和国に眞実に忠誠を尽すことの保証が我々の最高の関心事であること、議會が

関知することに疑問を持たず、議会の忠実な奉仕者であることの保証をモンクに求めている。モンクは、再度の返事の中で、自己の経験をとりあげ、ユトレヒト同盟諸州での軍務で自己の軍事技術で奉仕したこと、ここでは軍人が市民的權威の命令を受容し、逆に市民的權威に如何なる命令も与えなかったと抗議した。「服従こそが私の偉大な原理である」と付加したわけである。

モンクの軍隊に起った唯一の変化は一六五五年政府不満の故に免職になったR・グリーンがモンクの騎兵隊に復職したただけであった。歩兵連隊の同僚指揮官は中佐に昇進したA・ハウムズを除いてすべて留ったのである。唯、タルボットの歩兵連隊には、モンクが手紙で強く抗議したとはいえ、若干の交替があった。一〇月に王党派の蜂起による危機が発生するが、ランプ議會がモンクの軍隊をそのままにしておいたことが、結果的には、逆にランプを救うことになったといえる。その理由はスコットランドに新しい将校が現われなかったからである。また皮肉なことに委員達は、イングランドでは一〇月ランプ議會に対決することになる軍隊の将校を任命していたのである。驚くべきことはランプ議會が将校の政治に関して情報を得ていなかったことである。

注

- ① 拙稿「イギリス王政復古の諸問題」政経論叢、第四八号、注⑩、五八頁参照。
- ② Cf. Davies, *Op. Cit.*, p. 106.
- ③ Cf. Davies, *Ibid.*, p. 108. J. R. Jones, *Country and Court, England 1658-1714*, 1978, p. 122.
- ④ Cf. Jones, *Ibid.*, p. 122.
- ⑤ Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 106, 122. Jones, *Ibid.*, p. 121.
- ⑥ Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 110-1.

ランプ議会の活動

ランプ議会が最初にその審議を行った重要法案は免責・赦免法であった。即ち「最近の期間中に行爲あるいは作為されたものに対して免責と赦免とを与える一法律」であった。この法案は五月二三日に第一読会通過、翌日第二読会通過、同日常設委員会に付託された。この法案に費消された時間はこれに対して大反対があったことを示している。

提出された元の法案が存在せず、委員会での採決も下院議事録に記録されてはいない。長びいた討論の理由が殆ど判明できない。唯、法案に関して三回の採決の数字のみが記録されているだけである。次のような条項に「必要な」という言葉が挿入されて三六対二八で通過した(この「必要な」という決定的言葉の挿入に責任を持ったのはヘジリッジであるとされる)。即ち、「必要な諸給与及び手当金に関して既に支払われたすべての金額は許容されるべきである。また支払われ補償された右諸給与及び手当金の受預者も然りである。」この条項は、激しく議論され最終的には否決された次の提案、即ち、すべての人々が護民官体制下で受領したすべての公的給与ないし譲与金を返還すべきであるという提案、に代替したものであった。

この法律通過には、すべての赦免には四〇シリングの手数料を支払うべきであるとの提案に対する四三対二四での否決。マルアドミニストレイション誤った行政の罪を犯した如何なる官吏もあるいは他人に損害を与え、適法手続に違反したことを作為したすべての人々も赦免から除外されるべきであるとの提案に対する三一対二八での否決。以上が夫々随判していたのである。また通過した法律にはこの給与に関する条項に付加するに次のことがうたわれてあった。即ち、議会に対する暴力的及び不法な妨害がなされた後、共和国の利益に反するまた法律に反する多くのことがなされてきた。しかし護民官あるいは評判のよい議会の權威を口実にして仕事を続行してきたすべての人々は赦免されるべきであること。一六五

三年四月一九日以後におけるすべての法的諸手續や諸決定は裁判における法的権力の欠如によっても問題にさるべきではないこと。当該日時からのすべての名誉称号は無効であること。当該日時からの官職の譲与は承認されえないこと。また納入遅滞の消費税の支払いを無視した農業家はこの法律の法益から除外されること。更に赦免を要求するすべての人々は「唯一者、国王位、あるいは貴族院」のない共和国に忠実であることの宣言書にまず署名すべきであること。以上のことがうたわれてあった。^①

かかる法律は將校や兵士に不安を残したと言われる。ランバートは、ラドロウに会い、法律が將校の過去の行為に対して何らの安全（保障）を与えないことを理由に、激しく非難した。ラドロウは、共和国の破壊によって富み、また議會の呼び戻しに反対した者以外、議會が刑罰しないに違いないと返答し、またヘジルリッジは法律の完全かつ包括的性格を弁護したとされる。しかしランバートはこの法律が將校を議會の慈悲心のもとに置くことになる^②と反論し、また他の軍指導者もかかる法律が「不完全かつ無効果」な状態で生み出されたと考えたのである。従って免責・赦免法は紛争を沈静化するよりも逆に嵐を強烈化したといえる。それは上級將校と若干のランパー達との苦闘に満ちた争いを内包して、後述するように、議會の再度の解散に導いていくのである。

以上のような議會と軍隊との争いの結果から生れる危険を倍加したのは個人間の不和であった。例えば、フリートウッドはヴェインにランプが呼び戻された時同意した諸条件を議會人が守らなかったと非難した。更に、構築さるべき国家像「憲法問題についても相異した。ヘジルリッジは、それをどのようなものであるかを定義しなかったが、「純粹共和制」を擁護し、ヴェインは大衆が気狂であるので、「敬虔なかつ聖なる人間」に政府を委託させねばならないと主張した。フランス及びヴェネチアのイギリス駐在代表はランバートがかかるヴェインの立場に与しており、ラ

ンプが何時でも追放されるだろうと信じたとされる。

かくの如き議会と軍隊との指導間の不和に加えて、軍隊自体にも問題によって分裂が存在したことである。それは元老院問題に現われた。軍指導者は元老院を欲したのみならずその議員になることを望んだ。これに対して評議委員にならなかった将校達は、彼らのコーカスを持っており、単一の院を明らかに要求したのである。若干のランパー達是如何なる種類の元老院にも反対した。しかも議会内のある派閥は下級将校にかかる他の院に反対するよう煽動したのである。しかし他のランパー達は、毎年選出される元老院の構築によって、軍指導者を満足させることを希望したのである。しかしながら、一般的に言えば、何人の議員も軍人からのみなる元老院を受認したように思われないことは確かである。^③

以上の如く、国家評議会及びランプ議会の活動をみると、国家政治体制のみならず他の積極的な改革もなされていないのが注目される。^④従って、既述したように、護民官体制下で職位を剝奪された人々にその職位を回復し、その反対にクロムウェル主義者を追放した。しかしランプ議会の寡頭制的な自己満足は、軍指導者の忠誠を獲得しなかったし、またランプ議会の呼び戻しに主として力があつた下級将校の帰依も漸次喪失していくのである。

注

- ① 免責・赦免法については、Cf. Davies, *Op. Cit.*, pp. 112~3.
- ② Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 113~4. Jones, *Op. Cit.*, p. 120.
- ③ Cf. Davies, *Ibid.*, p. 114.
- ④ 但し、デイビースの強調したように、この時期のランプ議会及び国家評議会の統治に特徴的なことは、出版の自由や宗教的自由に関する限り、何の拘束も課さなかったことである。例えば、出版の自由については、T・マボットは五月三日の二

ユースレターで、「ウェストミンスター・ホールにはこの目的〔長期議会の呼び戻し〕のための文書で充満している。毎日新パンフレットが出版されている」と注目した。かかる記述の正確さは、有名なトマソン・トラクトの序文で、G・K・フォードスキューが与えた数字によっても確認されうる。即ち、トマソンは一六五八年に二八二冊のトラクトを、一六五九年には六五二冊のそれを蒐集したのである。宗教的自由については、クエーカー教徒に対する群衆暴力がなされたが、これに対する法の執行は一般的に効果がなかった。しかし全体としてみれば、内乱発生以来この方、ランブが支配した五ヶ月間は、それ以前と比較すれば、寛容が一般的であったとされる。Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 118~9.

王党派の活動とブーリスの蜂起

以上のような軍隊とランブ議会の対立抗争を一時的に沈静化せしめたのが王党派の蜂起計画やその実行であった。これを主としてデイベイスに依拠して一瞥しよう。老いた王党派員達は一六五四年頃から「秘密の絆」(“Sealed Knot”)として知られる会議を形成していた。彼らは一六五五年のペンラドックの蜂起を熟していないとして反対したが、政府によるこの蜂起の迅速かつ容易な鎮圧は彼らの慎重さを正しいものにした。それで彼らは一般的には耐待に賛成したのであるが、このこととこの蜂起により弱体化した財政は、彼らを代表とする王党派を無活動に陥ち入らせていった。しかし王党派の希望はランブ議会、軍隊、共和派内に多くの派閥が存在したことであった。王党派の一人は次のように述べそれを認識していた。即ち「秩序と統治と比較して混沌が完成している。党派が浮き島の如く存在し、時にはそれらが合体して大陸の如く出現する。〔しかし〕次に起る潮の干満がそれらを分離するので、それら党派が次にどこに存在するのか殆ど知りえないのである。」^①もとよりかかる政府側の分裂はチャールズ二世の復活をもたらす程深くはなかった。しかも不幸なことに、王党派内にも自己の敵対集団と同じく統一が欠如していたのである。

まず海外で維持されていたチャールズの小さなコート内で個人的嫉妬が存在した。例えば、チャールズよりもヨ

ク公に加担する王黨員もみられた。特に注目すべきは王権の復活をめぐって外国の援助を求めるか否かという旧き問題をめぐって統一がみられなかったことである。意見の相異はハイドとモーダントとに明確に現われた。ハイドによれば、「チャールズ二世はイギリス人そのものであり、またプロテスタントそのものである」。従って国王は自己の復位を自分自身の利益を常に心している外国の君主よりも自己の臣民に頼るべきことを感じるであらう。従って仕事は国内で始めるべきである。かかるハイドの観念から生れた具体的政策とは、議会内に友人を作り、かかる者をして軍隊を煽動させ、また逆に軍隊内の友人をして議会に対抗させることであつた。彼によれば、輕拳は王党派の最も熱意ある者の犠牲をもたらずのみである。②以上のことをハイドはモーダント宛手紙で知らせたのである。

これに対してジョン・モーダントは「悪い病氣に対する悲しい治療」として、外国からの援助を考えていた。しかし大陸からの直接的援助の見通しは暗かつた。モーダント自身は、一六五八年六月、反逆罪で告訴され、高等裁判所裁判長の決定で無罪を言い渡された人であり、王党派の中で、最も活動的、楽天的で、また熱心であつた。彼は「新王党主義者」としばしば呼称されたプレズビテリアンとの同盟を形成しようと試みたりしたが、デイビスの分析によれば、不満ある階層や国王の帰依者からなる統一戦線を形成する男ではなかつたのである。特に政治状況や人間に関する判断に非常に欠陥があつたとされる。特に議会及び共和派の分裂が修復できない程に深まるには時間が必要であることを把握できなかったわけである。それでも彼は容認された王党派の指導者の必要性を国王に説き、「ザ・ラスト」と呼称される指導者グループを形成させたのである。一六五九年三月一日、国王は次の人々に王党派の指導者としての委任状を公布した。即ち、モーダント、ベラシーズ卿^{ペラシーズ}、ラフバラ卿^{ラフバラ}、J・ラッセル大佐、W・コムトン卿^{コムトン}、R・ウィルス卿^{ウィルス}、に対してである。彼らは国王殺しを除いて反乱者と交渉し報酬を与える権限が与えられた。国

王は、武装して蜂起した者達が君主制の回復のために闘っていることを直ちに宣言するか否か、あるいは自己の身体を暴力から安全ならしめかつ国の法律を擁護するために闘っているか否か、の宣言を彼らの自由裁量に委ねたのである。五月後G・ブース卿^サが宣言を發布した根拠がここにある。^③

トラストのメンバーは王党派蜂起のために種々の計画を立てたが、またその一人であるモードントはその計画をブラッセルに行った時国王に説明したが、全般的にみれば、イギリス諸州での同時蜂起の組織化で多くの失望に合ったといえる。特に数ヶ月間、彼らは、イングランド外の軍隊、即ちスコットランド、アイルランド、フランスにいる軍隊による自分達の援助の可能性という幻想を抱懷していた。しかしかかる軍隊の共和国への執着が彼らの希望を遮断したのである。それにも拘らずモードントや他の熱狂家は自分の運を賭けることを決意した。即ち、モードントは、例の「秘密の絆」のグループのメンバー達が国王の大義のために行動を起さず、逆に王党派員に蜂起を中止させようとしていることを知り、またかかる条件下では、チャールズ二世がイギリスから再び通信を得るまで動かないことを確信した。しかしそれにも拘らず、七月九日、モードント、ウィラビィ、グレンビル、マッシー、ペイントン、ニューポート、タイタスが会合して八月一日を蜂起日と決定したのである。^⑤

かかる王党派の蜂起計画に対して、政府側は如何なる対策をとったのか。時期を若干遡って考察しよう。護国卿リチャードも、切迫した反旗の行爲があるとの風評で、四月二三日、全ペイピストや王党派員に三日のうちにロンドンを去り、六月一〇日以前には帰京してはならない旨の布告を發布した。またその後構築されたばかりの国家評議会及び復活したランブ議会もチャールズ・スチュアートによる即時の侵入の意図があるという報告を治安委員会から受取ったので、フランスから来たいく人かの王党派員の逮捕、また大尉タイタス、大佐マッシー、A・ブラウン他四名に

対する逮捕令状や馬匹や武器の押収令状の発行、H・バーネス他銃製造人の店の搜索、オックスフォードやグロースタシャーにおける疑わしい家の探索等、暴動の準備に対処した。しかしこれら多様な命令は殆ど良い結果を生み出さなかったで、警戒の弛緩をもたらした。それが前述した王党派による夏の暴動の計画を進めるのを許したのである。^⑥

しかしながら、記録されている通達から判断すれば、国家評議会は、七月初期頃、蜂起が間近に発生するとの情報を獲得し、情報委員会とともに、王党派の準備と並行して警戒の手段を採っていた。即ち、七月初旬、ロンドンにおける危険な人物の家宅搜索とそのすべての馬匹の捕縛命令が出された。約六〇〇頭が確保され、これは後に竜騎兵として六中隊の配置のために使用されることになる。しかし数日後には、評議会はより明白な情報を受けるようになり、かつその命令もより特定したものになっていった。かくして王党派蜂起への準備体制は整っていくのである。これを若干事例的に指摘しよう。一、王党派が占拠すると予想された三地域、即ち、チェプストウ、チチェスター、アランドルの防衛への配慮。二、王党派が占拠を予定したヤーマス港に船舶が入り、その搜索。三、以前共和国への敵対者であった者すべての帰宅とそこから五マイル外への離脱禁止。四、七月一日、イングランド及びウェールズを一一の地域に分割。その正規軍及び民兵軍の指揮官に殆ど陸軍大佐を任命。五、大佐シドナムの希望により、エリザベス・ウィラビィ夫人、大佐ウィリアム・レッグ、アンドリュ・ニューポート、ジョン・モードアントへの逮捕令状の発行。レッグとニューポートとの逮捕及びロンドン塔への投獄。モードアントは逃亡(王政復古後、スコットの告白によれば、ウィラビィ夫人が逮捕されて、王党派の会合を正確に話していたことが判明)^⑦。

かくして国家評議会は今や蜂起について十分知るようになり、それについて十分な対抗手段が採れるようになった。

た。著名な陰謀家の逮捕。この中には、J・グレンヴィル卿^{サア}（解放宣誓で釈放）、P・ホワード（一〇〇〇ポンドで保釈）、H・ミドルトン卿^{サア}及びハウ（をグロースターで拘置）、メアリ・ホワード夫人、プロデリック、大佐ブレイク等がいる。小将ブラウン、小佐バビングストン、大尉エルズモア、W・ラッセルへの逮捕令状の発行。七月二五日、マッシー逮捕の約束を履行した者に一〇〇ポンド支払いの権限を評議会がデイスプロウに付与。マッシー七月三一日に逮捕されたが同夕方逃亡。評議会は密告者や抽収した手紙類で得た情報によって王党派の蜂起計画、地域に対して陸軍を強化することができた^⑧。但し、何ら特別な警戒がとられなかった地域がある。それはチェシャー、ランカシャー、北ウエールズである。デヴィイスの分析によれば、評議会は、ブースとその同僚達が正に蜂起を行わんとするまで、あるいは蜂起を行った時点まで、彼らの計画を完全に知らなかったという仮定が妥当であるとされる。かかる無智は、他の計画の多くを暴露した密告者達がブースのそれを知らなかったか、あるいは、プレズビテリアンの指導者達が所謂「秘密の絆」の一人であり、王党派から裏切り者の一人であると思われた当のリチャード・ウィリス卿^{サア}を嫌悪して遠ざけ、他の人々に注意を払っていたかも知れないということ以外考えられないとされる。ともかく一般的には、王党派指導者達の多くの逮捕とランブ議会による対抗準備で多くの蜂起は未然に抑止されたといえる。唯、例外は王党派大佐アイアランドの指揮したリバプールの占拠と北ウエールズを少ばかり占領した蜂起、更に一時的に成功した富裕なプレズビテリアンであるサア・ジョージ・ブースの反乱であった。ここではブースの反乱を一瞥しよう。

七月三一日日曜日の午後の説教直後、ヨリングストンで戦闘用意のドラムがたたかれた。ダービー伯爵やキルモレイ子爵その他地域の有力者によって支持されて、ブースは既定日に五〇〇人位を集めた。彼は、国王のメッセイジと国王が直ちに渡ってくることにについて、モードアントの通信を受理した。時間を失することなく一隊は大会戦を行う予

定であつたロウトン・ヒースに行進。チェスターの市民が自分達を迎えるために、門を開くのを確信して、ブース一隊は、八月二日、朝早くそこを占拠した。T・クロクストンによつて城はこれら一隊に対して持ちこたえた。ブース一隊は大きな銃を何ら持たなかつたので、可能なことと言えば、城の封鎖と食糧が欠如して相手が降伏するのを信じてゐただけであつた。

この反乱支持のためにこの日二つのアピールが発せられた。^⑩第一のアピールは「かつて幸福であつたこのイギリス王国の貴族、紳士、市民、フリーフォールダー、ヨーマンの宣言」である。この宣言は次のことを主張した。即ち、イギリス人にとって、宗教、自由あるいは財政について根本が何ら解決されていないこと。立法権が篡奪されていること。大衆の苦情が妥当に訴えられうる唯一者あるいは会議体を持っていないこと。それ故、議会の自由の擁護、既知の諸法律、法自由、また祖先に知られていない不法で恣意的でかつ支持できない課税に今や呻吟している国家良民の財産、を支持するために武器をとつたこと。また未払い給与の支払いの約束。更に軍隊の給与の増額。人間の良心への課税に反対することの約束。などである。

この宣言と一緒に第二のアピールとして、「サア・ジョージ・ブースから友人への一手紙」が印刷された。これは第一のアピールの内容を再述し、同一目的を断言しているが、貴族やジェントリー階級を魅惑するような階級意識が滲透しているとされる。即ち、この手紙は、蜂起が敗北したならば、「卑しいかつ分派的党派が貴族や分別ある庶民を抑圧するに違ひない」こと。もし權威にある人々が、議会の両院に旧きメンバーの復帰を認めるか、あるいは、新しいかつ自由な議會を召集するならば、武器を捨ててゐることを約束したわけである。^⑪これらアピールが反乱地域の住民にどの程度影響を与えたかは定かではないが、現存の支配に対する批判が相当広範囲であることを示す文書であら

さて政府及び議会の対応はどうであつたのか。国家評議会は、暴動という言葉を受け取つた時、ブースの海路によるチェスターの到達を阻止すべく、海軍に戦艦を送ることを命じた。また既存の二中隊の竜騎兵を六中队まで増加させ、それらをT・ブリッジの指揮下に入れること。一四を下だらない新しい歩兵連隊を相異なる地域から徴集。大佐に自己の部隊の將校任命を付与すること。などの緊急的処置をとつた。しかしながら、ブースに対決する軍隊を直ちに必要としていることはもとよりであつた。ランプ議会は、少しの躊躇後、ランバートを総司令官に任命した。国家評議会は、八月五日、彼に与えた任命書で次の権限を与えた。即ち、チェスターからリンコンに至る諸州及び北部六諸州の軍事作戦の遂行。自己の騎兵及び歩兵、リルバーンの騎兵、ヒュースンの歩兵、更にビスコウの歩兵（これは東部諸州に散在していた）の指揮。必要時、他の軍隊から援軍を呼び出しうること。また付加的に、連隊、騎兵中队、歩兵中队の徴集を妥当と考えた場合、かかる部隊の將校任命権の付与。等である。同時に、ディスブラウに南西、南ウェールズ、グロスタシャー、ウスタシャーの軍隊の指揮権を付与した。

イギリス王政復古の諸問題 (二) (矢崎)

た。ランバート側が優勢で、ブースの軍隊はあらゆる方向に散ってしまった。多くは騎兵が追ってこれない綜劃地コングレイターに逃げ込んだとされる。即ち、ブースの半武装した志願兵はベテランのランバート部隊に対抗できなかったのである。ブースは交戦インゲイジメントを回避して、一週間あるいはそれ以上長く戦場を確保できると考えたとされるが、しかしかかる遅延戦術は、他の蜂起者からの援助の見通しが消滅した時、無駄になったわけである。チェスターは抵抗なしに翌日降伏。ランバートの計算によれば、勝者側は一名が殺され、三名負傷。敗者側は三〇名が殺され、三〇〇名が俘虜になったとされる。ランバートはこの勝利によって軍隊の分割が可能になった。即ち、リバプール奪取のためにランカンヤーに一部の部隊を、チャーク・カースル確保のために他の部隊を、夫々送った。そして両軍は容易にその使命を終えたわけである。

以上のブースの反乱の一時的成功は、ジョーンズによれば、プライドのページやチャールズ一世処刑によって、離反してしまっていた前議会会人たる「プレズビテリアン」のリーダーシップと支援とに依存していたことである。既にみたように、他の地域においては旧キャバリアは、政府の迅速な対応もあつたが、王党派代理人に自分達の約束を果たさなかったわけである。また王党派の蜂起は時期を大きく誤ったといえる。もし蜂起が数週間遅かったならば、後述する軍隊とランプ議会との公然たる亀裂と一致したかも知れないからである。

ブース自身は婦人の衣装に変装して脱出しようとしたが、ニューポート・バグネルで捕縛され、その後ロンドン塔に投獄された。彼はヘジリッジ、サルウィ、ヴェインによって取調べられたが、しかし決して裁判にかけられなかったし、すべての刑罰から免れたのである。^⑭

王党派による蜂起に対して、ランプ議会は、それがもつすべての欠陥にも拘らず、血に飢えてはいなかった。蜂起

の参加者を処刑しなかったからである。しかしこの反乱は国庫充足のためにすばらしい機会を与えたといえる。八月二七日、以下の者達の不動産及び動産を没収する七人委員会を設置した。即ち、チャーク・カースルに部隊とともに行進した小将ランドルフ・エジャトンを初め、ロバート・ウェルデン、ブース、更にエジャトンを迎え入れたトマス・ミドルトン卿及び一六五九年五月七日以来、共和国に対して武器をとり、あるいは陰謀しあるいは陰謀を陰蔽した者の不動産及び動産の没収である。更に一六四九年一月三〇日以後、“先王の息子”チャールズの大義を推進してきたすべての者は、彼らが既に政府と和解していなければ、同一の罰を受けることにしたわけである。この七人委員会の委員は、州委員会のための規則を作成し、かかる委員会の委員達を任命した。しかしこの仕事は殆ど完成しなかったとされる。州委員会は自分達の権限が不完全であり、自分達への指示が修正されることを欲した。最も重要な衝害は、委員が州委員会の権限を没収財産の差押えに限定し、その売却あるいは貸与の権限を与えようとしなかったこと及び被没収者の代理人による支払いを許さないことであった。しかも一〇月一三日、軍隊によるランプ議会議解散は、多くの場所で、没収手続を中止ないし遅延させたわけである。従って財政問題はこれによっても何ら解決しなかったといえよう。

注

- ① Quoted in Davies, *Op. Cit.*, p. 124.
- ② Davies, *Ibid.*, pp. 124, 126.
- ③ Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 124~7.
- ④ 種々の計画については Davies, *Ibid.*, pp. 128~30. をみよ。
- ⑤ Davies, *Ibid.*, pp. 130~1.

- ⑥ Davies, *Ibid.*, pp. 127~8.
- ⑦ Davies, *Ibid.*, pp. 132~3.
- ⑧ 将官・部隊・人数等について Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 133~4.
- ⑨ Cf. Davies, *Ibid.*, p. 134.
- ⑩ 一週間後に、第三のアピール、即ち、「サア・ジョージ・ブースとともに従事している騎士、紳士から、シティ、ロンドンの市民、他すべてのイギリス自由人への一至急便」が出た。第二のアピールが貴族的であつたとすれば、これは民主的であつたといえる。これはレベラーやアナバプティストも理解できる感情を具体化したものとされる。このアピールは次のことを表明したわけである。即ち、その地位あるいは富が何であれ、「自由と統一との共通なかつ平等な紐帯」を万人に与える自然に依拠しても、また、「人物、地位、質、あるいは、階級に関係なく万人に普遍的で平等でかつ公平な」諸法律や諸慣習に依拠しても、イギリス人は同一の生得権の相続人であること。これら諸権利が今やイギリス人から剝取され、その替りに、恣意的投獄、課税、独占、消費税—これらすべてはマグナ・カルタと権利請願とに相反するものである—が生れた。この寡頭の専政は若干の少数派、野心的な軍高官の利益のためにのみ構築されたこと。またこのアピールは、宗教におけるすべての強制権力を最も強い言葉で否認した。そして最後に、民兵軍、軍隊及び全国民は、すべての当局がそれに従うべき、自由な議会の迅速な選挙を確得するために、団結すべきことを提案して終つてゐる。この第三の長い民主的アピールがラン・P支持者達に影響を与え、あるいは、人をしてブースへの反対を思いとどまらせたという証拠は何らないとされる。唯、注目すべきは、これら三つのアピールの内容に相異があるが、表面的にせよ、王党派の反乱に加担するという形態で、現存の寡頭の権力批判や底辺大衆の権利主張がなされていることである。この「至急便」は後に出るパンフレットのパターンを定めたものである。 Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 136~7.
- ⑪ Cf. Davies, *Ibid.*, pp. 135~6.
- ⑫ ランバートの小軍隊にあつて、彼の騎兵の一部は既に少佐クリードのもとで、ブースの近くにいた。リルバーンのそれはヨークシャーにいた。ビスコウの歩兵は召集されねばならなかった。砲兵小輻重隊があつたが、それが戦場に到着したか否かは疑問であり、またブリッジ下の竜騎兵も然りであるといわれる。 Cf. Davies, *Ibid.*, p. 139 note 89.
- ⑬ Cf. Jones, *Op. Cit.*, pp. 122~3.

⑭ Cf. Davies, *Op. Cit.*, pp. 139~41.

⑮ Cf. Davies, *Ibid.*, p. 141.